

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00121

研究課題名(和文) 現代ロシアにおけるソビエト・ポップカルチャーの再解釈・文脈改変の事例研究

研究課題名(英文) Reconsidering and Changes of Context of Soviet Pop Culture in Modern Russia

研究代表者

長谷川 章 (Hasegawa, Akira)

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：60250867

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はソビエト・ポップ・カルチャーの中でも特に夭折した人気ロック・シンガー、V. ツォイ(1962-90)のイメージが現代ロシアでどのように受容され、文化的文脈を変更されていったかを究明することを目的とする。研究の結果、ツォイはロシアのリベラル派、ナショナリストさらにはウクライナ・ナショナリストにまで独自の解釈を施されアイコンとして利用されていることが明白になった。そこには、ペレストロイカ開始前に成年に達した「最後のソ連世代」の共通体験の影響がある。だが、一方でその世代がソ連後の世界で何を最優先の価値としたかがこれほどの改変の要因となった可能性があることを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ソ連崩壊期から現代までの文化的変容やソ連期の文化的記憶の継承・改変については文学研究では積極的に扱われてきた。しかし、サブカルチャー的領域でのこうした改変は日本ではまだ例を見ず、本研究は学術的に先駆的と言える。またこの方面での研究を進めていくことは、ウクライナ侵攻で破局的段階に達したかのように映るロシアの現代文化が、一旦破局に向かいながらも実は多様性に満ちていたことを明らかにしていくことになる。現行の抑圧的体制からの文化的転換のあり方を考える上でも、有効な判断材料を提供するはずで、その点で社会的意義も有すると判断しうる。

研究成果の概要(英文)：In the fields of Soviet pop culture this research project is especially aimed at investigation of modern Russian adaptation and contexts' changes about the images of V. Tsoi (1962-90), a popular rock singer, who prematurely died. As results of research, it came out that the images of Tsoi have been unexpectedly used by Russian liberals, nationalists and even Ukrainian nationalists. This tendency is considered to be influenced by common experience of the last Soviet generation who got adult before beginning of Perestroika. At same time forking of different Tsoi's images is explained by their selections of values after the Soviet era.

研究分野：ロシア文化論

キーワード：ロシア音楽 現代ロシア文化

1. 研究開始当初の背景

本報告者は、2011年刊行の野中進(他編)『ロシア文化の方舟』(東洋書店)で、チェブラーシカ等、ソ連期の子供向けアニメが現代ロシアではどのように受け止められているかを考察する論文「『三丁目』のソ連—ソヴィエト・アニメと現代からの眼差し」を執筆した。また、それをさらに発展させた論文「チェブラーシカはなぜ悲しげなのか—ソ連崩壊以降のソヴィエト・アニメーション解釈を読みなおす—」も公刊している(『秋田大学教育文化学部研究紀要・人文科学・社会科学』73号、2018年)。2つの論文が対象としたのは、10歳くらいまでの児童向けの作品である。だが、それ以上の青年層を対象としたポップカルチャーの研究についてはまだまだ手付かずであり、さらに、この領域で現代ロシアにおけるソ連期の文化的記憶を考察したのも少ない点に思い当たり、ソ連期の青年向け文化と現代との関係に特化して研究することを決意した。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、ソ連期の青年層の芸術・文化が現代の政治的な文脈の中で、どのように受容され改変・再創造されているのかを、ツォイの創造活動を中心的な事例として解き明かすことにある。その際には上記の改変・再創造がどのような社会的要因と関係しているかを精査することも目指す。

(2)本来、ソ連と現代ロシアの間には大きな断絶があったはずである。しかし、近年、ソ連期の歴史解釈を改変して、ロシア政府のイデオロギーの正当化に利用される傾向がますます強まっている。その中では音楽や映画といったポップカルチャーも例外ではない。ツォイの記憶の改変もそのような傾向の影響下にある。一方で、こうした改変は、ロシア政府とは別の立場の人々の抗議運動にもみられる。また、露骨な改変を避け、芸術家として良心的な作品化を心がけるセレブレニコフのような監督(2018年にツォイを主人公とした映画『LET0』を製作)でも、当然ツォイを現代的な文脈において再解釈した部分はあるはずである。こうした三者を比較対照することで、現代ロシアの文化状況を立体的に解明することを目指す。

3. 研究の方法

(1)伝記的資料を収集し、ツォイの音楽活動について取りまとめながら、彼が出演した映画作品などの分析も行う。

(2)ソ連崩壊後のツォイの記憶の受容、改変、再創造について、具体例を取り上げて考察する。主な対象となるのは、ツォイの歌「変革を！」がプーチンなどの独裁的体制への抗議として使われた例、一方でツォイの別の歌「郭公」が現代ロシアのナショナリスティックな文脈で引用されている例、ウクライナ・ナショナリストの文脈におけるツォイのイメージの援用例、およびセレブレニコフなどのようなツォイを主人公とした映画について個々に分析を進める。

(3)上記の事例研究を、ソ連後期から現在までの社会的変動に位置付けて、改めて考察し直し、ツォイのケース以外のソ連期ポップ・カルチャーでの同様の傾向を探し出し、ソ連後期、ソ連崩壊、経済混乱の90年代、プーチン登場以降の変化と対照しながら、この30~40年のサイクルでのロシア文化全体のあり方を考える上での材料となるように整理した上で、総括する。

4. 研究成果

(1)初年度にあたる2020年度の成果は単著論文「現代ロシアにおけるヴィクトル・ツォイのイメージについて」(『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学』第76集、2021年3月)にまとめられた。ここでは、現代ロシアにおいて多用されるツォイのイメージを読み解く上で、まず、ツォイの存在を、ソ連末期から崩壊後の1990年代の「不良少年もの」や「アウトロー」映画の系譜に関連づけて論じた。同論文の要旨は以下である。

ソ連では早くから不良少年を教育によって更生させるテーマの映画がつくられたが(1931年エック監督『人生案内』等)、ソ連末期には社会主義的教育理念が形骸化する中で、社会からドロップアウトした少年たちが独力で生きようとする作品が登場する(1989年カネフスキー監督『動くな、死ぬ、甦れ!』、同年ボドロフ監督『自由はパラダイス』等)。ただし、こうした映画が生前のツォイの芸術活動とリンクすることはなかった。一方、同時代、ツォイの唯一の主演作であるヌグマノフ監督『僕の無事を祈ってくれ』(1988)では、ツォイ演じる主人公はアウトローを演じ、地方の町の麻薬流通組織と闘う。だが、この映画でドロップアウトした少年たちが描かれるわけではない。「不良少年」あるいは「独力で生きる少年」にとって、ツォイのような「アウトロー」像は将来の自分になるべき理想像という関係にあることは推測できるが、ソ連時代の段階ではこの両者は基本的に分離したままであった。

ツォイが死去しソ連が崩壊した後の90年代、混乱したロシアでは、ソ連で作られることはなか

ったバイオレンス映画が流行した。その中で注目すべきはバラバノフ監督『ロシアン・ブラザー』(1997)である。ポドロフ Jr. (上述の映画監督ポドロフの同姓同名の息子) が演じるアウトローの主人公は絶大な人気を集めた。『ロシアン・ブラザー』自体は民族差別感情を隠そうともしない作風で批判も受けるが、これに出演したポドロフ Jr. 自身が映画監督業に進出する。ポドロフ Jr. の第 1 作『シスターズ』(2001) では、小学生の異父姉妹がマフィアの抗争に巻き込まれ彼女たち独力で逃避行を図る。姉はツォイの熱烈なファンという設定であるが、この映画の中ではかつてアウトロー役で人気を博した監督本人も彼女らを見守る存在として出演している。こうして、ツォイ、アウトロー、独力で生きようとする少年たち(この場合は少女だが)のテーマにつながりが見出されていく。

また、映画作品だけではなく、ツォイとポドロフ Jr. 本人にも意義深い共通点がある。ふたりはともにアジア系の血をひく(ツォイの父は朝鮮系で、ポドロフ Jr. にはブリヤート人の祖先があり、そうしたアジア性は彼らの容貌にも反映している)。一方で、さらに注目すべき点は、両者が夭折したという事実である。ポドロフ Jr. は 2002 年に第 2 作の撮影で赴いたコーカサスでロケ中に雪崩のため 30 歳で亡くなってしまった。この悲劇を通して、両者は青年層に絶大な人気のあった不遇のスターという点で、どちらかを思い出せばもう片方のことを想起するよう相互補完的関係性をもつことになった。

ポストソ連時代におけるツォイのイメージにとって、以上のポドロフ Jr. の存在を介して新たな解釈を加えられるようになったことは、最初の注目すべき現象だと思われ、2002 年度はこの点を解明できたのが、主要な成果と言える。

(2) 前年度がソ連崩壊前後から時代を下ってツォイのイメージ受容の変化を追ったのに対し、2 年目となる 2021 年度は、逆に現在から 2010 年代のごく新しい時期を研究の対象とすることにした。理由は、ツォイ没後 30 年の 2020 年が近づくにつれ、ソ連崩壊後の時期全体の中でも特にツォイのイメージがあちこちで援用されるようになったためである。その中でも、ツォイが非公認文化の中でデビューした頃を描いたセレブレンニコフ監督『LETO -レト-』は注目すべき作品で、公開同年の 2018 年カンヌ映画祭で音楽賞を受賞したこともあり、本作を中心に研究を進め、年度内に単著論文「映画における「懐疑論者」の役割 —セレブレンニコフ『LETO -レト-』について—」(『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学』第 77 集、2022 年 3 月) を公開した。要旨は以下である。

『LETO』は、ソ連が停滞から改革へ、さらには一挙に崩壊へ向かっていく大変動の直前であるツォイのデビュー期を精緻な時代考証を経て描いている。ロックが非公認ながらアマチュア芸術としては公認する芽ができていた模様や、先行するロック世代とツォイの芸術観の違いなどを知ることができ、この作品は、映画による最新ソビエト・ロック史研究的な側面も有している。

しかし、監督自身が映画内でその時代の再現性に自ら疑いを投げかけ、観客に批評的に映画を見るよう呼びかけている部分も映画の根本には見て取れる。特に、作品の各所に登場し「こんなことはなかった」と観客に訴える人物の存在は重要である。この人物は、劇中で「懐疑論者」と紹介され、登場人物たちに個人的に語りかけ、現実にはあり得なかったシーンについて注釈を施す。彼は映画内の人物と観客の間に介在し、過去の世界の何が現在と切り結ぶのかを観客に問いかけているのだ。

具体的に作品内でのシーンを取り上げて補足説明をしたい。電車内でツォイたちが大人から言いがかりをつけられ、刑事らしき男から暴力をふるわれる場面では、ツォイたちは、西側のミュージシャン、トーキング・ヘッズの〈サイキカラー〉を歌いながら、反撃を試みる。しかし、歌が終わると「懐疑論者」が登場し「こんなことはなかった」というプラカードを出し、列車の非常ブレーキ・ハンドルを引く。すると、場面は変わってツォイの一行のひとりが大人しく警察に連行されていく様子が描かれる。ここでは、この映画が単なる過去の再現ではないことが強調される。だが、それだけではない。当時の権力側からの一方的な暴力に対して、あの頃反撃できればという、当時を体験した人々、あるいは当時を知識として知る現代の人々の願望もここでは表現されている(さらに、観客はそうした願望が不可能だったことにも思いをきたす)。「懐疑論者」が観客に批評的に映画を見るように仕向けるというのは、以上のように過去と現在の間の関係を再考させることを指すのである。

また、このような批評的視点は同時に、映画を現在において作る者自身の状況についても喚起することになる。プーチン政権が芸術への抑圧を急速に強めていく時期に、レジネフ時代の芸術に抑圧的な時代を描くことは、ここでも、40 年前と現在の関係について批評的に考えさせることとなった。この映画の製作時にセレブレンニコフが芸術活動への補助金詐欺で不当な告訴を受け、ウクライナ侵攻が始まると監督は出国を余儀なくされた経緯を考えると、なおさら上記の視点がロシアの現在を考える上で重要なものの一つであることに気づかされる。セレブレンニコフによるツォイを主人公にした本作は、ソビエト時代を描きながら、以上のような現代ロシア社会のあり方を深く考察するための思考実験ともなっているのである。それは、ツォイの記憶の受容と再創造の歴史の中で、もっとも実りある成果の一つと言えるだろう。2021 年度の研究活動では以上のような結論に至ることができた。

(3) 最終年度 2022 年度について成果の総括をする前に、この 3 年間の研究環境についてお断

りしておかなければならない。2020年度、2021年度はロシアの図書館などでの文献収集を想定していたがコロナ禍で国外はおろか県外移動も一時的に制限される事態が続いた。そのため、インターネットを通しての文献収集(海外ネット書店での注文も含む)に切り替えざるを得なくなった。結果、基本的文献については入手ができ、研究活動自体は継続可能となったが、コロナ禍の制約はそれでもかなりあったと言える。

しかし、2022年2月のロシア軍によるウクライナ侵攻開始は、さらに深甚な影響を本研究に与えた。ロシアへの渡航が当面不可能になってしまったが、もちろん、影響はそれだけではない。本研究は1980年代から現在までの40年近いスパンの文化変動を分析の対象としているが、その論考の着地点となるべき現在において、破局的な事態が展開することになったのである。

そのため、2022年度の研究活動については、まず、現在の映画やポップ・カルチャーが戦争開始から急速に抑圧されていく様子を追跡しなければならなかった。セレブレンニコフの他、多数の映画人・ミュージシャン・文学者が追われるように国外へ脱出していく中で、本研究の意義も大きく揺れ動いた。ブレジネフ時代に非公認文化として始まったロック音楽は、ペレストロイカ期に公認文化となり大々的な広がりを見せたが、ソ連崩壊後、混乱の1990年代、徐々に独裁化を強めるプーチン政権下でも、誕生当初のブレジネフ時代と同様に、自由を希求する精神に貫かれていた。これは、翻って考えれば、ロックに限らず芸術全般が多少の独裁体制でも抵抗する力をまだ有していたことになる。ウクライナ侵攻以前は、そこまでの認識で研究を進めることも可能だったが、しかし、侵攻開始とロシア国内の言論弾圧強化によって、こうした芸術やポップ・カルチャー自体が息の根を止められかねない最悪の事態にまで陥ってしまったのである。

このため、2022年度前半の研究活動は現在の芸術家(特にセレブレンニコフ等の映画人)の状況と絶望的な抵抗に焦点を絞り、その結果の一部をとりまとめ、『週刊エコノミスト』(2022年6月28日号)に「弾圧の危険冒して「反戦」映画人に消えない良心の火」と題した小論を公表した。

一方で、2022年度後半は、上記の危機的状況を見据えたうえで、3年間の研究活動を総括すべく準備に取りかかった。具体的には、上記論文で分析考察した事例だけではなく、ツォイのイメージが、2010年代にロシアやウクライナのナショナリストにそれぞれ違う文脈で用いられたケースを検討した。例えば、モクリツキー監督『ロシアン・スナイパー』(2015)では、ツォイの歌「郭公」が主題歌として女性歌手によりカバーされた。しかし、この映画で描かれた独ソ戦でのクリミア半島のセヴァストーポリ防衛戦は、否応なく2014年ロシアによる同半島併合を想起させるものとなった。その際に、ロシア・ナショナリストの側からは、映画も主題歌も、愛国主義的な文脈で、2014年の半島併合を是認してくれるように受け止められたのである。反対に、同年のウクライナのマイダン革命を受け、発表されたベラルーシ出身のバンド、リャピス・トルベツコイ「光の戦士」のプロモーション・ビデオ(ロシア語)では、ロシアの政権と激しく対立するマイダン革命支持のウクライナ・ナショナリストを、ツォイが見守るイメージが登場している。

このように政治的立場が違いながら、それぞれのやり方でツォイの記憶を改変しながら援用するメカニズムについては、2023年度中に公開の単著論文で総括される予定である。どの立場でも共通したソビエト時代のツォイの記憶があるのだが、ソ連後の政治的な視点や体験によって、それぞれが遡及的にソビエト期の本来の記憶を独自に改変していったと現時点では考えられる。その点を集中的に精査した論文を完成させることで、本研究の最終的成果としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 長谷川章	4. 巻 4752
2. 論文標題 弾圧の危険冒して「反戦」 映画人に消えない良心の火	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 週刊エコノミスト	6. 最初と最後の頁 72-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川章	4. 巻 77
2. 論文標題 映画における「懐疑論者」の役割 セレブレンニコフ『LETO -レト-』について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学	6. 最初と最後の頁 69-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20569/00005923	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長谷川 章	4. 巻 76
2. 論文標題 現代ロシアにおけるヴィクトル・ツォイのイメージについて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学	6. 最初と最後の頁 63 67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20569/00005528	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------